

審査の結果の要旨

氏名 クズネツォフ ドミトリー

クズネツォフ・ドミトリー氏の論文「Soviet Contribution to the Global Built Environment of the Cold War Era, 1946-1991 (冷戦期 (1946-1991) におけるソ連のグローバルな建造環境に対する貢献)」は、冷戦期にソ連が行った建造環境に関する国際協力の過程と、その結果グローバルにどのような影響をもたらしたのかを、ソ連の視点から考察したものである。本論文は、これまでにない地理的・時間的なスケールにおいて冷戦の歴史を説明しつつ、これまで分析が及ばなかった建造環境の貢献過程に分析のメスを入れ、我々の理解を進展させてくれるものである。また、本論文なしには今日の中国のようにソ連の経験や実践を学んだ国々について適切に理解することはできない、という点からも高く評価できる。

本論文は全体が序章と結論、及び本論の全 7 章からなる。序章で既往の研究、方法等を述べた後、本論では、時間軸に沿って、5つの都市や国家を分析する。第 1 章では、ソ連の国際協力がどのような過程で形成されたかについて述べる。第 2 章では、中国、北朝鮮、モンゴル、ポーランドにおける戦後 (1946-1956) の国際協力として、大衆のためのイデオロギーである「箱」としての建造環境を創造する過程を分析する。第 3 章では、1950 年代以降の国際建設市場に対するソ連のアプローチにおける劇的な変化について考察する。ここでは、ローカルなニーズや状況に対応しながら、建築において不要な象徴性を排除したこと、また、テクノロジーや科学の分野における偉業の広範囲な宣伝と、グローバルな国際協力市場における柔軟性があったことが、明らかにされる。第 4 章では、1966 年当時、いまだ国内の一部であったタシケントで発生した地震からの復興において要求された「回復力」に分析を加える。第 5 章では、米ソ関係がこれまでになく良好となり、両国の対話の促進や国内状況のより良い理解を通じて経済成長を図ることができると考えられていた 1970 年代から 1980 年代の東南アジア、中央アジアにおけるソ連の貢献が分析される。最後の結論においてクズネツォフ氏は、人間と建造環境との関係、つまり、「パターン」という新しい概念に置き換えることによって、ソ連の貢献を分析する。これによって冷戦期におけるグローバルな建造環境へのソ連の貢献の変遷が分析可能となる。

結論におけるクズネツォフ氏の「パターン」、すなわち、人間と建造環境との関係に関する論点は以下の 3 つである。ひとつは、ソ連の国際協力アプロー

チは、マクロレベルにおいて、上からの締め付けによる支配的なものからリベラルな参加型へと変化した。同時に、より具体的なレベルでは、ビジネスを重視した姿勢やグローバルな権威を保つ必要があった段階から、イデオロギーを犠牲にしつつ実用性を重視するように変化していった。二つ目は、こうしたソ連の姿勢は、世界的なトレンドに敏捷に対応するものであったことである。つまり、東側の社会主義勢力を強めるためのイデオロギーの輸出は、次第に協力という背景の中に消えさり、やがてそれ自体が社会主義諸国の資本主義化を本質的に進める方法となっていったのである。三つ目は、外交・国内政策を通じて国際協力への取り組みを進めることによって、ソ連は純粋なイデオロギーから国際的なリーダーシップを執るための戦いへと方向を移していったことが明らかになった。

クズネツォフ氏の本研究のもうひとつの価値は、多くの第一次資料を発見したことにある。モスクワ等の諸機関に所蔵される、国際プロジェクトのリスト、図面などが初めて学問研究の俎上に載せられたことも高く評価することができる。

近年になって、サステナビリティという概念が多く提示されるようになったが、実はソ連の貢献はこのサステナビリティを早い時期から実現していた。すなわち、それらは地域開発や都市開発を改善または創出するものであり、プロジェクトの実現を通して、人々が必要とするより良い生活の質、また、経済を強化するための社会基盤を提供し、現地の専門家を養成し、長期的な成長、ひいては独立を支援するための設備を提供するものであったという点で先駆的な意味があった。我々は、冷戦期の状況を建造環境の観点から読み解くことによって、今日の国際協力に関してより深い示唆を持つことができる。しかし、ソ連の例に見るように、私有化や企業といった概念や、リベラルかつ機敏な政策の欠如、イデオロギーの制限といった点は、ソ連の貢献における負の側面であったことも、本論の中で指摘される。

このように、不明であった過去の事実の発掘だけでなく、きわめて今日的な課題への新たな示唆を示してくれている本研究の成果を、審査員一同は高く評価した。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。